

2023年横浜ナザレン教会・受難節第四主日(3/27)礼拝

使徒言行録第二章 22 節から 36 節

「主とは誰か」

### 【聖書】

使徒言行録 2: 22 イスラエルの人たち、これから話すことを聞いてください。ナザレの人イエスこそ、神から遣わされた方です。神は、イエスを通してあなたがたの間で行われた奇跡と、不思議な業と、しるしとによって、そのことをあなたがたに証明なさいました。あなたがた自身が既に知っているとおります。23 このイエスを神は、お定めになった計画により、あらかじめご存じのうえで、あなたがたに引き渡されたのですが、あなたがたは律法を知らない者たちの手を借りて、十字架につけて殺してしまったのです。24 しかし、神はこのイエスを死の苦しみから解放して、復活させられました。イエスが死に支配されたままでおられるなどということは、ありえなかったからです。25 ダビデは、イエスについてこう言っています。『わたしは、いつも目の前に主を見ていた。主がわたしの右におられるので、／わたしは決して動揺しない。26 だから、わたしの心は楽しみ、／舌は喜びたたえる。体も希望のうちに生きるであろう。27 あなたは、わたしの魂を陰府に捨てておかず、／あなたの聖なる者を／朽ち果てるままにしておかれない。28 あなたは、命に至る道をわたしに示し、／御前にいるわたしを喜びで満たしてください。』

29 兄弟たち、先祖ダビデについては、彼は死んで葬られ、その墓は今でもわたしたちのところにあると、はっきり言えます。30 ダビデは預言者だったので、彼から生まれる子孫の一人をその王座に着かせると、神がはっきり誓ってくださったことを知っていました。31 そして、キリストの復活について前もって知り、／『彼は陰府に捨てておかれず、／その体は朽ち果てることがない』／と語りました。32 神はこのイエスを復活させられたのです。わたしたちは皆、そのことの証人です。33 それで、イエスは神の右に上げられ、約束された聖霊を御父から受けて注いでくださいました。あなたがたは、今このことを見聞きしているのです。34 ダビデは天に昇りませんでした。彼自身こう言っています。『主は、わたしの主にお告げになった。「わたしの右の座に着け。35 わたしがあなたの敵を／あなたの足台とするときまで。」』36 だから、イスラエルの全家は、はっきり知らなくてはなりません。あなたがたが十字架につけて殺したイエスを、神は主とし、またメシアとなさったのです。」

#### 1 「主とは誰か」

聖霊降臨の日に起こったことを引き続き、見て行きます。聖霊なる御神が降ったその日、ペトロたち十二使徒は立ち上がり、語り始めました。教会が最初に行った伝道の業、説教です。この説教にタイトルをつけるとしたら、皆さんはどうしますか？この説教が最も言いたいことは、何なのでしょう。

ペトロは、先ず、聖霊降臨の出来事は、「終わりの時、すべての人にわたしの霊を注ぐ。すると人々は預言する」なるヨエル書の神の約束が成就した出来事だ、と語ります。終わりの日、それは「太陽は暗くなり、月は血のように赤くなる」「天には不思議な業、地には徴が現れる、血と火と立ち上る煙がそれだ」という危機、しかし「主の名を呼び求める者は救われる」という希望を示す、ヨエルの預言を引用します。ここで、イエスさまよりも数百年程前に活躍した預言者ヨエルは、「主なる神の名を呼ぶ者」のことを預言しており、イスラエルの人々もそう理解してきました。しかし、ここでのペトロは違います。ヨエルが預言した「主」とはいったい誰なのか？を、残りの22節から36節にかけて語っています、つまり、教会の最初の説教は、「私達が呼び求めるべき主とは、いったい誰なのか」という事を語っているのです。

答えは36節。「イスラエルの全家は、はっきり知らなくてはなりません。あなたがたが十字架につけて殺したイエスを、神は主とし、またメシアとなさったのです。」メシアとは、「油注がれた人」という意味のヘブライ語、ギリシャ語では「キリスト」、救い主です。イスラエルという国は、神に導かれた神の民ですが、軍事力の強い大国に支配され、苦しみの連続でした。やがて人々は、「神が油注がれて遣わされる救い主が、自分達神の民を救ってくださる」と、メシア、キリストがやって来るのを待ち望むようになります。イスラエルの人々は、七百年とも五百年とも言われる長い長い間、メシア・キリストを待ち続けていました。

一方、「神は主とし、またメシアとなさったのです。」の「主」は、主人、支配者という意味があるギリシャ語です。誰に支配されるのか、誰を主人とするのか、は、私達の人生に決定的な影響を与えます。しかし、「あなたの主は誰ですか」そう問われれば、「私の主人は自分自身です」と答える人が大半でしょう。実は私もそう思っています。誰か他の人間に支配されて生きるなんてまっぴらごめん、そんな不自由な生き方はしたくない、自分で考え、自分で判断したい、と思います。しかし、この歳になるまで、いろんな失敗をして、別の考えも持つようになりました。自分自身を主として生きようとすればする程、却って人は不自由になるものだ、と言う事に気づかされたのです。自分は神ではない、不完全な存在ですから、先の事は分かりません。様々な不安や恐れに囚われるし、色んな欲望にも引きずり回されます。人とは難儀な生き物です。自分自身を主人に自由に生きたいと願えば願うほど、却って不自由になるのですから。

青山学院大学の宗教部長を務めておられる塩谷直也先生が、十代の若者向けに「視点を変えてみれば、十九歳からのキリスト教」という本の中で、分かりやすくキリスト・イエスを信じる信仰の本質を語っています。昨日から本を探しているのですが見つからなくて細かい点は不正確なのですが、大筋は間違っていないと思います。塩谷先生は、その本の中で、人生をスポーツに譬えて次のように書いています。「神を信じるということは、自分の人生の監督を神さまとして生きることだ」。「監督、自分」「選手、自分」という生き方から、「監督、神さま」「選手、自分」で共に戦っていく、プレイしていくのが信仰だ、というのです。監督は、選手よりもそのゲームや対戦相手をよく知っていますし、選手のよいところも悪いところも、選手以上に知っていなければ務まりません。全部知っていて、最善の選択をするのです。

選手は、監督の指示に従わねばなりません、監督と話し合うことはできます。監督と選手が、ちゃんとコミュニケーションがとれている時、選手は本人の力以上のものを発揮できるのです。私たちの最善の監督は、私達を造られ愛し導いてくださる神です。その通りだろうと思います。そして、神を監督として生きる命は、私達が思っている以上に遥かに素晴らしい命です。

## 2 聖書を用いて

教会の最初の説教は、私達が「主」とすべき「神」をもっと具体的に指さします。「あなた方がそのような自分の主、救い主とすべきお方は、人が十字架に殺し神が三日目に甦らさせたナザレの人イエスです。」それが、「あなたがたが十字架につけて殺したイエスを、神は主とし、またメシアとなさったのです。」というペトロの言葉です。しかし、ペトロは、自分の個人的な考えで語ったものではありません。それは、彼が、ヨエルの預言も含めて、聖書から四か所、引用している事から分かります。24節から28節は、詩編16:8~11をギリシャ語の旧約聖書から引用しています。31節は詩編16:10のヘブライ語聖書からの引用。34節から35節には詩編110:1があります。そして、少しわかりにくいのですが、30節「**彼から生まれる子孫の一人をその王座に着かせると、神がはっきり誓ってくださった**」と言う部分は、詩編132:11です。

これからもわかるように、教会は、自分達の信念や考えを語るものではありません。神の言葉である聖書じしんが、その時代、その時代に生きる信仰者に「これを聞きなさい」と指し示すみ言葉を語るのです。何故なら、説教の前の聖霊降臨の直後、祈る者達に与えられたのは、よその国の言葉、彼らの内側ではなく、外からの言葉、神の言葉でした。だから。教会は神の言葉を通じて示されたことを、人々に語るのです。

しかし、聖書には、詩編の他にもたくさんの書物があるのに、どうして詩編だけがいくつも引用されているのでしょうか？それは、ペトロが詩編をそらで言えるほど覚えていたからではないか、と思います。彼はガリラヤ湖の漁師出身で、字が書けたかどうかよくわかりません。しかし、会堂でささげられるユダヤ教の礼拝の中で、節をつけて詠うように朗読された詩編は、よく覚えていたのだと思います。船でガリラヤ湖に漕ぎ出し漁をしている時も、家にいる時も、心が弾む時も、穏やかな時も、心配事で眠れない夜も、彼は詩編を口ずみ、生活の中で神を見上げて生きてきたのでしょう。ペトロだけでなく、当時のイスラエルの庶民は、みな詩編を覚えていた。ですから、この時のペトロは、詩編16篇や110篇の巻物を、わざわざ開いて皆に読んでかかせたわけではなく、生活の中で口ずさんでいたように、すらすらと語ったのではないか、と思います。しかも、本当に語るべき内容にふさわしい詩編が口をついて出て来たのだと思います。これにはペトロ自身も驚いたでしょう。自分が語っているのではなく、聖霊なる御神が、妙なる名監督となって、選手ペトロを用いて、ふさわしい言葉を語らせてくださっている、と確信し、今までに経験したことのないような、なんとも不思議な感覚の中で、静かな喜びに満ちて神を賛美しつつ、語ったに違いありません。

### 3 イエスの十字架と復活

ペトロが、聖霊に促されてナザレの人イエスの十字架と復活を語ります、22節から24節。この僅か2節の間に、「神」という言葉が5回も出てきます。ナザレの人イエスに関して起こったことは、全て神がなさったことだということです。ペトロは会衆に迫るように語ります。「あなた方は、ナザレの人イエスが神から遣わされた方だとよく分かっていた筈だ、神は、様々な不思議な業や奇蹟や徴をあなた方の前で行わせて、その事を知らせたのだから。」そして、到底人間では考えられないことですが、「このナザレの人イエスがあなた方に引き渡されたのも、神が全部ご存じの上で、そのご計画に従って行われたことだ」と続けます。

しかし、ユダヤの人々が、神を知らないローマ軍の手を借りてイエスさまを十字架に架けて殺す事をも、神のご計画だ、とは、ペトロは語っていません。イスラエルの人々の罪を罪としてごまかす事なくはっきりと示すのです。このことから、聖霊なる御神が語っておられることが分かります。「イエスさまが十字架に架けられたのは、紛れもなく、自分達が神になろう、自分達の主人となろう、という罪の故だ」とはっきりと断言できるのは、神だけだからです。そしてペトロは続けます。24節、「しかし、神はこのイエスを死の苦しみから解放して、復活させられました。イエスが死に支配されたままでおられるなどということは、ありえなかったからです。」

ここの「しかし、神は」という言葉は心に刺さります。あらゆる人の罪に逆らって、どんなに深く大きい罪をも打ち破って神は働かれる、その意味の「しかし、神は」。人の罪に直面して「罪がある。だから」ではなく、「罪があっても、しかし」と神は語られたのです。神が、罪に対して挙げたノー、拒絶、それが人の罪ゆえに十字架で殺されたイエスさまの復活です。

### 4 詩篇16

ペトロは、この「しかし、神は」のイエスの復活を伝えるために、25節から28節で詩編16:8から11を引用します。ダビデの詩だと伝えられていますから、イスラエルの人々は、詩の中の「私」を「ダビデ」として読み、彼が神により頼んで生きる喜びを詠ったものと理解しました。ですが、ペトロは、新しい読み方をします。「私」をダビデではなく「ナザレの人イエス」として読んでいます。「イエスは、いつも目の前に主を見ていた。主がイエスの右におられるので、／イエスは決して動揺しない。26 だから、イエスの心は楽しみ、／舌は喜びたたえる。体も希望のうちに生きるであろう。27 あなたは、イエスの魂を陰府に捨てておかず、／あなたの聖なる者イエスを／朽ち果てるままにしておかれない。28 あなたは、命に至る道をイエスに示し、／御前にいるイエスを喜びで満たしてください。」

イエス様は、いつも目の前に神を見ておられた、だから動揺することなく、イエス様の心は楽しみ喜びに満ち、唇は神を賛美する。体も希望のうちに生きる、福音書で語られたイエス様の姿そのものです。全知全能であり万物を造られた天の御神とこのように深く強いつながりを持ち続けたイエス様だからこそ、不思議な業、奇蹟の癒しを行い、弱く小さくされた



人々、人間が蔑む孤独な者達と向き合い、友となられた。弟子たち、群衆は、そのようなイエス様の言葉と行いに神の力を見出し、喜び、深く慰められ、励まされ、癒されて来たのです。そんなイエス様を、主なる御神が死んだままにしておかれるはずはなく、十字架の死という最も惨めな死から、イエス様はよみがえらされた、このことをイエス様より約千年前に生きたダビデ王は預言した、とペトロは語ります。

更に、ペトロは、言葉を重ねます。「詩篇16篇の『わたし』がダビデ王でない証拠は、ダビデが死んで葬られた墓がエルサレム市内にあって皆、その事をよく知っているではないですか」。ダビデは死から復活していない、であれば、詩編16の「わたし」がダビデでないことは明らか。ダビデは預言者であったから、やがて来られるイエス・キリストを預言したのだ、詩編110がその証拠だと、理路整然と語ります。

こうして、「ダビデが預言したメシア、救い主こそ、あなた方が十字架で殺し、神が復活させられたナザレ人イエス、このお方を神は主とし、メシアとした」つまり、「十字架と復活の主イエスこそ、神と等しい救い主であり、私達が呼び求めるべきお方です。」教会の説教は、人が十字架に殺し神が甦らされたイエスこそ、罪と死に勝利された方、救い主・キリストだと高らかに宣言するのです。

## 5 イエスを主として生きる

では、十字架と復活のイエスをわが主、わが救い主としたら、どうなるのでしょうか。もう一度、ペトロが引用した詩編16に戻り、「主＝イエス・キリスト」「私＝自分自身」として読み直してみましょう。『わたしは、いつも目の前に主イエスを見ていた。主イエスがわたしの右におられるので、わたしは決して動揺しない。だから、わたしの心は楽しみ、舌は喜びたたえる。体も希望のうちに生きるであろう。あなた主イエスは、わたしの魂を陰府に捨てておかず、あなた主イエスの聖なる者を朽ち果てるままにしておられない。あなた主イエスは、命に至る道をわたしに示し、御前にいるわたしを喜びで満たしてください。』

復活の主イエス・キリストの御前に生きる喜びがうたいあげられています。主イエスがいつも私の右にいてくださる。つまり、主イエスからすれば、私の方の腕は左腕、盾を持つ腕です。主イエスは、いつも左手の盾で私を守ってくださる、というのです。何から守るのか、私達を恐れや欲望の虜とする罪と死から守ってくださるのです。だから私達は、たとえ激しく揺さぶられても、このお方につかまりつつ生きていくことができます。目の前に主イエスを見るように、主イエスの深い愛と強い御力を感じることができるから。私の心は、主にあって楽しむ。口は自然と主イエスを賛美します。印象深い「体も希望のうちに生きるであろう。」という言葉は、直訳すれば「私の体も希望の内に住む」であります。かつて自分を自分の主人として生きていた時は、様々な欲望や不安に囚われてしまっていた肉体、老いては衰えていくしかない、という絶望の中にあつたこの肉体も、イエスを主として生きる時、新しい命、永遠の命に復活する、という確かな希望の内に住まうことができる！主イエスは、そうして従いゆく者にとこしえの命の道を示してください、まさに真実な喜びに溢れる命を生きていくことができ

る、そう聖霊なる御神は、私達に教えてくださいます。

十字架に架かって死なれ、神によって三日目に甦らされたイエス・キリスト、このお方を、自分の主として、救い主として生きて、仲間と共に、命から命へと歩んで行きたい、そして、血と火と煙の立ち上る終わりの時である今、試練の中、絶望の中にあって苦しむ一人一人に、イエス・キリストを主として呼び求めて生きる喜びの命を伝えたい、と心から願ってやみません。